

2025 年度 蓑プロジェクトレポート

【 担当教員 】

学部・学科・専攻	職 名	氏 名
代表者:地域共創センター	准教授	三上賢治

【 プロジェクトの概要 】

目 的

「安芸太田町 蓑リサーチプロジェクト」は、安芸太田町に伝わる伝統文化である「蓑」に着目し、その歴史や技術、素材、地域的背景を調査しながら、現代における新たな継承や活用のあり方を考えることを目的として、2025 年度から新たに開始した地域展開型芸術プロジェクトである。計画書では、本プロジェクトを「伝統技術の継承」「地域の魅力づくり」「アート・デザインによる地域課題の解決」に関わる取組として位置づけている。

蓑は、日本古来より稲藁やスゲなどの自然素材を用いて作られてきた雨具であり、かつては山間地域の暮らしを支える生活道具として重要な役割を果たしていた。しかし、生活様式の変化により実用品として使われることは少なくなり、現在では技術の継承や素材の確保、担い手不足といった課題を抱えている。一方で、蓑は自然素材を活かした美しい手仕事であり、地域の気候風土や生活の知恵が凝縮された文化資源でもある。本プロジェクトでは、そうした蓑の価値を改めて見つめ直し、失われつつある地域の伝統技術を、教育・デザイン・地域文化の観点から再評価することを目指した。

2025 年度は、安芸太田町で蓑づくりに関わってきた方への取材や現地リサーチ、体験ワークショップを実施し、蓑づくりの技術や背景にある地域の暮らし、素材として用いられるミヤマカンスゲの生育環境などについて学んだ。加えて、調査成果を広く伝えるため、蓑の歴史や特徴、つくり方、魅力や課題を整理した紹介冊子の制作に取り組んだ。これにより、本プロジェクトは、単なる民具調査にとどまらず、地域文化の継承と再発信を目指す教育実践として展開された。

実施内容

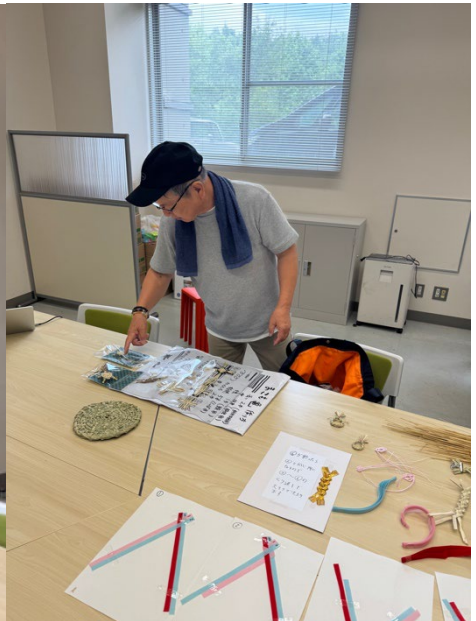
本プロジェクトには、地域共創センターの三上を中心に学生 4 名が参加し、必要に応じて地域関係者の協力も得ながら進めた。主な現地活動として、2025 年 5 月 17 日に安芸太田町でのフィールドワークを実施し、蓑づくりに関わる方への取材、関連資料や現物の見学、自然環境の調査を行った。

当日は、まず安芸太田町坪野にて関係者への挨拶と取材を行い、蓑の由来や構造、作り方、地域における役割などについて話を伺った。その後、文化交流センター等で蓑や関連資料を見学し、さらに深入山周辺へ移動して、素材となるミヤマカンスゲの生息地を視察した。これにより、学生たちは、完成した民具としての蓑を見るだけでなく、その材料がどのような自然環境の中で育ち、どのように採取・加工されてきたのかを現地で体感しながら理解を深めた。

また、現地では実際の蓑づくりの技法についても学び、職人の手仕事を間近に見ながら、素材を編み込み形にしていく工程や、身体に合わせて仕立てていく工夫について理解を深めた。写真記録からも、学生たちが蓑の編み方や構造を真剣に観察し、説明を受けながら制作技術に触れている様子、実際に蓑を身につけてその機能や形状を体験している様子が確認できる。こうした体験的な学びを通して、学生は蓑を単なる「昔の道具」としてではなく、地域の自然環境・生活文化・身体感覚に根ざした総合的な知恵の産物として捉えることができた。

次年度には今年度の現地調査を踏まえて、蓑についてわかりやすく発信するための紹介冊子づくりを進める。冊子案では、「蓑ってなに？」という導入から始まり、地域性や歴史、つくり方、課題・魅力・未来の活用可能性までを整理しており、子どもや一般の読者にも親しみやすい構成となっている。こうした編集作業を通じて、学生は、リサーチ内容を単に記録するだけでなく、他者に伝わるかたちへ翻訳し、地域文化の継承に資するデザイン実践へとつなげていく。





【 プロジェクトでの成果等 】

本プロジェクトの成果は、第一に、安芸太田町に残る蓑づくりの技術や背景を、現地での取材と体験を通じて具体的に把握し、地域文化としての価値を再認識できた点にある。蓑はすでに日常的に使われる道具ではないが、その背景には、山間地の気候に適応した生活の知恵、自然素材を無駄なく活かす技術、家庭や地域で受け継がれてきた手仕事の文化がある。本プロジェクトでは、こうした要素を実物・実演・現地環境の三つの側面から学ぶことで、蓑を地域の重要な文化資源として捉え直すことができた。

第二に、素材・技術・地域環境の関係を総合的に学べた点大きい。蓑は完成品だけを見てもその価値を十分には理解しにくい、実際にはミヤマカンスゲという地域の自然環境に根ざした植物資源があり、それを採取し、乾燥・加工し、編み上げる一連の工程が存在する。本プロジェクトでは、生息地の視察も含めて調査したことで、伝統技術を単独の「技」ではなく、地域の自然と暮らしに支えられた文化システムとして理解することができた。これは、地域文化を継承していくうえで非常に重要な視点である。

第三に、学生にとって、失われつつある伝統文化を現場で学び、その価値を再編集・再発信する実践的な学びの機会となった点も重要である。学生たちは、職人や地域の方から直接話を聞き、実物に触れ、技法を観察し、自らの身体感覚も通して蓑を理解した。そのうえで、冊子という形で内容を整理し、他者に伝える作業を行ったことで、単なる見学や調査に終わらず、リサーチを編集・デザインへとつなげる経験を得た。こうした過程は、地域資源を発見し、その魅力や課題を社会に伝えるための表現力・構成力・協働力を育む教育的成果につながった。

今後は、冊子の完成・発表に加え、ワークショップや展示、素材活用の試作などへ展開することで、蓑をめぐる地域文化の継承と再創造をさらに深めていくことが期待される。